

講義ノート(2)

皆さん、こんにちわ。では第2回を始めます。前回は中東もイスラームもあまり関係なく、しかもちょっと理屈っぽい部分が多かったかもしれません。今日は具体的な話でお付き合いいただきましょう。旅の話です。まだどこにも書いてない、つまり「報告」がない話なので、前回の説明でいうと「残余経験」の部分に当たります。フィールドワークではないけれど、それ以上に重要で、のちのフィールドワークに大きく影響した、私にとってはかけがえのない経験です。

今日の話は第1部と第2部に分けます。第1部は、私が19歳だった1971年に初めて海外に出かけた時の旅です。第2部のほうは1974年から1975年にかけての旅です。これらの旅は当時の自分が思っていた以上に、数十年経った今日、あらためて意味を持ってきます。ですからちょっと言い訳がましいことを最初にお聞きいただいて、それから当時を振り返ってみたいと思います。ただし単なる老人のノスタルジーで終わらせたくありませんし、そんな話だったら若い皆さんはたぶん辟易するでしょう。ネット情報で恐縮ですが、タレントの高田純次さんが年をとってからやっちゃいけないこととして「昔話」と「自慢話」と「説教」を挙げているそうですが、私もまったく同感ですので、そうならないようにしたいと思っています。

**\* この講義の翌年に、第2部の旅の記録は、小町グループ著『サハラの旅 1974』、東京図書出版（発売：リフレ出版）、2021年4月発行、定価（税込）1100円、として世に出ました。**

さて、言い訳がましいことというのは、当時も今もそうですが、フィールドワークであろうとなかろうと、世界中いろいろなところを旅していて、ちょっと一息ついたとき「俺、こんなところで何やってるんだ」と自問することがよくあります。いろいろな意味が込められていますが、一つには「俺、バカなことをしているなあ」というふうに、一見客観的というか合理的というか、そうした理屈から考えれば「バカ」としか言いようのないことを自分にはしている。ただ、それは反省しているとか後悔しているということでは全然なくて、まったく逆に、晴れ晴れとしているんですね。バカなことには合理的な目的や理由などなくて、また他人に説明しなくてはならないような義務もない。

「俺、こんなところで何やってるんだ」の二つ目は、偶然に翻弄されたり偶然を利用したりしていると、思わぬところに運ばれて行って、気がつくとき今ここにいる。どうしてこうなっちゃったんだろうと思うのですが、これも後悔ではなくて、計画とか効率といった無理な枠から解放された爽快感につながっています。

三つ目は、地球の裏側の田舎や僻地などに行くと、毎日といってよいほど日本にいたときとは違う新しい光景を見、新しい人と会い、新しい経験をするんだけど、でも自分は自分で同じはずだよ、変わらないよね、という自問が湧きます。いわゆるアイデンティティみたいなものです。しかし同じとは言えないよなあという反対の答えも同時に湧いてきます。一方旅先で出会う人たちについても、ずいぶん俺とは違うなあと思う反面、ああこの人たちだって突飛なことをしているわけじゃなくて、淡々と生活を送っているという意味では同じじゃん、とも思うわけです。「同じ」か「違う」かという、前回お話しした近代科学の基盤に置かれている発想への疑問が「俺、こんなところで何やってるんだ」という言葉にごく自然な形で現れるんですね。これも一種の開放感かもしれません。世界は広くもあり、狭くもある。

他にもまだいろいろあるのですが、こうした感覚はじつは人生という大げさになりますが、生活の本質を突いているのではないかと思っています。旅というのはそれがなんの障壁もなく、ストレートに出てくる。それに対して仕事とかフィールドワークということになると、じつは同じような体験をするにもかかわらず、理屈やら合理性やら計画性やら効率性やら名目やら建て前やらといった邪魔で面倒くさいものに覆われるというか、そういうものに引っ張られてしまって、つまらなくなる。「カネをもらっているんだからしょうがないだろう」と言われればそれまでで反論できません(もっとも、それをうまく使い分けられる人もいるのですが)。ともあれその点旅は、貧乏とはいえ自分のカネを使っているのだから、他人からあれこれ言われる筋合いはないというクリアーさがあります。じつは私の人生でこういうクリアーな旅は今日紹介する二つだけで、その後はなんらかの形でカネをもらったの仕事と関わっていました。あえて今日「旅」を紹介する所以です。

もう一つだけ言っておきますと、今日これからお話しすることも含めて、「報告」には都合の悪いことは書けない、書かないという当たり前の大原則があります。他の人は知りませんが、少なくとも私を含めて多くの方は、意図的か不可抗力かは別にして、悪いことやまずいことをしてきたと思いますし、秘密にしておくべきことや隠しておきたいヤバイこと、恥ずかしいことがあると思います。それは世の常・人の常だと思いますが、「報告」には決して現れないと思っていいでしょう。これも報告や文章という人為的枠組みの限界ですね。(対面授業や居酒屋では、そんな話もできるんですがねえ！)

さて、ようやく旅の話に移ります。今日お話しする二つの旅は、仕事という足かせがなかった「残余経験」そのものです。フィールドワークを照射するためにも、どうしてもご紹介しておきたかったわけです。

\*\*\*\*\*

## 第1部

では<最初の旅>の概略を少しお話しておきましょう。長野県に生まれ育った私が東京

へ出てきて1年半ほどたった1971年の秋、大学2年生でしたが、それまで浅草の新聞店に住み込んで、バイトにバイトを重ねてせっせと貯めた50万円を手に、生まれて初めての海外旅行に出ました。当時大卒の初任給が3万円か4万円くらいだったと思いますから、私にとっては大金でした。ちなみに当時はまだ変動相場制に移る前の固定相場制で、1ドルが360円と決まっていました。しかも前年までは外貨の持ち出し制限額が1,000ドル(=36万円)だったのがようやく3,000ドル(=108万円)に引き上げられた直後でした。なお、海外渡航の自由化が実現してからもまだ数年でしたから、海外旅行は珍しかったんです。私は横浜港の大棧橋からソ連の船に乗って日本海のナホトカまで行ったのですが、大学の同級生たちが授業をほったらかして見送りに来てくれるという時代でした(おっと、こんな話から始めると高田純次から叱られそうですね)。

ナホトカからシベリア鉄道と飛行機を乗り継いでモスクワへ、そのあと鉄道で南下してキエフから黒海のオデッサ(いずれも現ウクライナ)へ、さらに船でコンスタンツァ(ルーマニア)、イスタンブール(トルコ)、ピレウス(ギリシア)を経て、エジプトのアレキサンドリアへ上陸しました。これが初めてのアラブの地でした。エジプトで約1ヶ月を過ごしたあと、放浪を始めました。再び船でアレキサンドリアからベイルート(レバノン)に渡り、シリア、イラク、イランをほつつき歩き、クウェートから船でマスカット(オマーン)やカラチ(パキスタン)などに寄りながら、インドのボンベイ(現ムンバイ)に上陸。ヒッピーの群れに混じりながらインド各地とネパールを放浪し、マドラス(現チェンナイ)から船でマレーシアのペナンへ。さらにニューギニアからオーストラリアへ向かおうと思ったのですが、事情があって香港経由で日本へ戻ったという次第です。約半年の旅でした。

この間、もちろんいろいろなことが山ほどあったわけですが、それを話し始めるときりがありません。そこでごく一部、たった2日間の記録だけ以下にご紹介します。イラクからイランへの行程です。じつはこのあとインドのデリーの安宿で旅日記(というかメモ)などをごっそり盗まれて、傷心にもめげず、まだ記憶があるうちにとインド放浪中に思い出しながら綴った文章です。こんなものがまだ残っていたんですよ! もちろんヤバいことは削除し、誤字や脱字、差別表現などは修正しました。

-----  
新年を迎えた。1972年。日本を離れてもう4ヶ月目。その晩は宿の一人きりの部屋で天井を見つめながら「よし、明日は航空会社へ行って東京までの切符を買おう。もう未練はない」と心に決めた。だが次の日、晴れ渡った空の下、町へ出たときには、昨夜の考えはどこかへ消えていた。旅を終わらせるのはいつでもできる。ここがつまらないのならどこか他の町へ行けばよい。暗いところでものを考えるのはまずい。バグダードを出ようとしたのはその3日後だった。とはいえ当面の行く当てはない。

一見気ままに見える放浪の旅も、思わぬところで世界の渦に巻き込まれる。このとき降りかかってきたのはイラン・イラク紛争と印パ戦争。それは漠然と考えていたアフガン越えに大きな障壁となって、僕は行方を失った。イラクからイランへの国境になっているカナキン

の峠は、2週間ほど前に起こった紛争のため閉鎖されてしまい、カイバル峠(注：アフガニスタンとパキスタンのあいだの有名な峠で、インドへ抜けるための要衝)も印パ戦争のためシャットアウトされているらしい。インドへの道は閉ざされてしまった。風の便りでは、アフガンまで行っている連中はもう一ヶ月近く動けなくて、ボーダーが開くのを長期戦で待つらしい。僕が今さらノコノコアフガンまで出かけていっても、戦争がいつ終わるのかはわからない。かといって南下してバスラから船に乗るのも馬鹿らしい。そのときムラムラと心に浮かんだのは「一度紛争の最中の国境を見てやろう」という思いだ。ここまで来ているからには行ってみようか。通れるかどうかはわからないが、とにかくカナキンの峠まで行こう。その先のテヘランまで行けばカイバル峠の確かな情報を持ったやつらがいるかもしれない。そんなことを考えていたとき、博物館の前で一人の旅行者と出会った。彼もまたインドを目指しているらしい。小柄で陽気な男で、意気投合したので、とりあえずテヘランまで一緒に行こうかということになった。名前は知らない。

翌朝 6 時に起きて、ジウムフリーヤ橋の先にあるさながら中古車展示場のようにおんぼろ車がひしめき合うバスの停車場へ行った。カナキン行きは 10 人乗りのマイクロバスで、客が一杯になるまで出発しないので、出発予定時間から 2 時間以上待たされ、その間乗務員の事務室に入り込んで何杯もお茶を出させた。そんなことをしているうちに昨日の男と一緒にになった。バグダードを出発してからは、早起きをしたのと、窓の外の風景が行けども行けども一面に広がる真っ白な塩湖ばかりの単調さで、最後部の座席でずっと寝ていた。国境の町カナキンに着くまで、バスは何回も停車した。県境の検問らしく、そのたびにパスポートを検査された。係員がわざわざバスの中に入り込んできて、地元の客でも身分証明書がないと引きずり下ろされた。イランと交戦状態にあるからか、やけに厳しい。国境はたぶん越えられないかもしれない。

カナキンは町というよりもさびれた村で、汚い家が並んでいるだけ。こんなのんびりした村が紛争中の国境の村だとはとても思えない。ここは両国を結ぶ一番の街道のはずなのに。イラク側のボーダーはこの村の先 20 キロとのこと。そこまでは乗り合いタクシーもバスもないので、歩くしかない。水は腹をこわすので、近くの茶屋でコーラを水筒に詰めてもらい、隣の食堂でカバーブ 2 本と丸パンを食べてようやく朝食兼昼食。リュックを担いで連れと一緒に歩き始めた。さすがに通る車がない。もともと、はじめから 20 キロ全部を歩く気はなかった。途中で来た車をヒッチしようと思っていた。最初は知床旅情などを歌いながら元気に歩いたが、からかいに寄ってくる村のうるさい子供たちの姿が見えなくなると、急に心細くなる。周りは岩だらけの山岳風景で、緑なんてこれっぽっちもない。聞こえるのは風の音ばかりで、車のエンジン音など皆無。やはり歩かなくてはならないかな。このあたりはもう標高がかなり高く、雲が低いところにかかっている。歩くことには多少の自信はあったが、どこまで行っても広い岩の原野ばかりで、陽も少し傾いてきたので、「今日はこの辺で久しぶりに野宿かな」と思い始めた。しかし夜はかなり冷えそうだし、夜盗に襲われる心配もある。そんなとき、背後から 1 台の軍の車がやって来た。天の助けとばかり手を振ったが、素通り。がっかりしていると、車というのは続いてくるもので、数分後にまた軍のジ

プがやって来て、今度は拾ってくれた。整然と軍服に身を包んだ将校のような軍人で、私と連れをじろじろ見つめていたが、あまり口をきかない。こちらも黙ったまま後部座席に座った。ボーダーの事務所の建物が見えるところまで来ると、「降りろ」と軍人さんはいう。きっと規則かなんかで部外者は乗せられないことにでもなっているのだろう。車からの降り際にアラビア語で「シュ克蘭」（ありがとう）と言うと、ようやくかすかな笑みが浮かんだ。

そこからボーダーまではまだ1キロくらいあった。そこを歩きながら見たのは、延々と続くトラックとバスの車列と貧しい身なりの難民とおぼしき人たち。どの車にもストーブやら鍋やら子供の玩具やら布団やら、ありとあらゆる家財道具が山のように積み、荷物の隙間から子供たちが顔を出している。車と車のあいだにはロープが張られ、洗濯物がずらっと干してある。やがて異様な匂いが立ちこめているのに気づいた。それもそのはず、路上も道端も一面が大小便の山。クサイのクサイの。きっともう長いことこうしてボーダーが開くのを待っているのだろう。あるトラックの運転手に尋ねたら、1週間近くもこうして並んでいるのだという。紛争が始まったので、故国に帰るイラン人やアフガン人たちがらしい。でもこんなにたくさんの荷物を積んでいたら、税関もさぞかし大変だろうな、などのんきなことを思いながら歩いていると、ようやくボーダーのオフィスにたどり着いた。

このボーダー・オフィスの係員がまた傑作。かなり年をとっており、鼻くそをほじりながら何回も僕のパスポートを調べ、首をひねるのである。どうも名前がわからないらしい。日本人のパスポートは初めて見たので、どこに名前が書いてあるのかわからないというのだ。このボーダーを通過するのはほとんどがアラブ人やイラン人なので、アラビア文字以外は苦手らしい。しかもその動作のルーズさといったら、よくこれでこんな重要な任務に携わっているな、と思えるほどだ。僕も最初は彼に合わせてのんびり構えていたが、僕と連れのパスポートを奥の部屋に持って行ったきり戻ってこないで、「これはもしかしたらここで夜明かしになるかな」と覚悟した。しかしこんな監獄みたいなところで寝るのもいやだったので、ずかずかと奥の部屋へ入って行って、早く返してくれるように督促した。すると彼は今からお茶を沸かすから、おまえらも飲めというのだ。こんな、パスポートにスタンプを押すくらいの簡単な事務手続きくらいさっさとやってくれなくちゃ困る。無理矢理パスポートを取り戻すと、こんなのんびりしたところにいつまでもいられないから、リュックを背負って出発した。だから税関も通らなかつたし、出国手続きが無事終わったのかも知らない。

イラク側のボーダーからイラン側のボーダーまでは1キロくらいあって、そのあいだは中立地帯になっているらしい。イラク側の建物を出ると、そこには運良くたまたまイラン軍のジープが停まっていた、向こうまで乗せていってくれるという。ずいぶんとサービスがいいなあ。乗れるものは乗らなくては損だからとお世話になった。するとしばらく行くと、こちら側にも避難民の列があった。まだイラン側のボーダーに着かないのだから、この人たちはイラン側は問題なく通過してきて、イラク側で足止めを食らっているということか。僕らだけなんの問題もなく通ってゆけるのはなんだか申し訳ない気がする。

イラン側のボーダー・オフィスに入り、入国手続きを済ませると、隣りに食堂のような

部屋があったので、コーラを飲みに行った。そこには兵隊たちが大勢集まっていて、熱気ムンムンだった。一人が僕らを見つけて、今イラクから来たばかりであることを知ると、きれいな英語で質問を浴びせてきた。「バグダードはどうだった？ イラク人は不親切だろう。イランはよいところだろう」。突然のことに面食らいながらも、「バグダードは物価が少し高くて・・・」と言い始めるや、何人もが相づちを打ちながら、イラク人は悪い連中だということを盛んに強調する。きっと彼らは議論でもしていたのだろう。みんなかなり興奮気味だったので、イラクを褒めたりしなくてよかった。

質問攻めからなんとか身をおかし、外に出た。夕暮れだった。近くに町はないようだし、こんな殺風景な建物にいるのもいやだったので、野宿をするつもりで連れと歩き始めた。だがイランに入ってから車の数も増えたので、ヒッチするのにさほど苦労はなさそう。今日中に行けるところまで行こうと思い、何台かの車を乗り継いだ。うす暗くなって車も少なくなってきた頃、名も知らない小さな町にたどり着いた。宿屋があるにはあったが、国境で5ドルしか両替しなかったし、テヘランまで3ドル以内で生活する予定なので、とても宿屋には泊まれない。町の中でチャパティ（注：直径30センチくらいの円盤状のパン）とカブの漬け物を買って、かじりながら町外れまで歩いた。野宿の場所探した。町の人たちは怪訝そうに僕らを見ていたが、おかまいなしに進み、町を出て寂しくなったあたりの道から少し外れたところに良さそうな原っぱを見つけた。そこで羊を追っていた少年を見送ったあと、そそくさと寝袋を広げて入り込んだ。日中は日が照っていたのでさほど感じなかったが、暗くなると急に寒さが襲ってくる。しかし空は晴れて満天の星。まだ腹は減っていたが、天の川を見ながら眠りにつくのは最高に気分がいい。

真夜中に、不意に連れから揺り起こされた。雨が降ってきたらしい。寝付くときにはあんなに晴れ渡っていたのに、空にもう星はなくて真っ暗。まわりの藪もざわめき、ポツリポツリ。寝ぼけているのでポーッとしながらも、荷物をまとめて、どこかに雨宿りする場所はないかと歩き始めた。雨はたちまち激しくなり、すぐにびしょ濡れ。こんな夜中に通る車もない。真っ暗な土砂降りの道を震えながら町の方に戻ってゆくと、右手に建築工事中の家を発見。天の助けとばかり飛び込むと、屋根だけかかった狭いスペースの土間にかなり年のいった老人が寝ていた。起こすのも悪いと思って別のスペースを探したが、6畳間くらいのこの場所しかなかった。仕方なく老人を起こして、朝まで寝かしてくれるように頼んだ。老人は「どうしたんだ」と言いたげに、眠そうな目をこすりながら起きてきたが、闇の中に見たこともないようなチャイニーズの乞食がずぶ濡れで立っているものだから驚いてしまって、しばらく呆然としていた。やがて事情を察してくれたらしく、自分の床を片付けて、近くから枕になりそうな材木を持ってきて、「ここに寝ろ」というジェスチャー。僕らが寝袋を広げれば老人の寝る場所がなくなってしまうほどの狭さなので、僕らは恐縮して隅のほうに折り重なるように寝て、老人の場所を残しておいた。だが翌朝目覚めると、老人が寝た形跡はなかった。どうやらそのまま起きていたらしい。その上、昨夜はかなりの寒さだったので、夜通し火を燃やし続けてくれていたようだ。僕らは疲れきって寝ていたのに、そんな配慮には気づかなかった。

老人は迷惑そうなそぶりも見せず、僕らが目覚めると、熱いチャイを沸かして出してくれた。お礼を言いたかったが言葉は全然通じないし、自分が持っているものといえば寝袋と汚い着替えくらいで、何もお礼の品はない。感謝の念を抱きつつ好意に甘えるだけだった。この朝は濃い霧が立ちこめ、とても寒かった。太い丸太を燃やしてくれる老人は、朝の光の中でよく見ればしわだらけの、経験豊かな顔をしている。そうこうするうちに、やがて建築工事の職人たちが集まってきたので、僕らも出発することにした。昨夜の雨も上がり、霧はまだ立ちこめていたが、ヒッチに差し障りはなさそうだった。老人に日本語で丁寧に「ありがとうございました」と誠意を込めて言ったら、ようやく笑ってくれた。

寒さに震えながらテヘランに向かって歩き出したが、僕らの手には一枚の地図もなかった。地図なしでヒッチするというのは無謀ではあるが、かえってそのほうが気が楽だ。地図があれば自分の位置が決められてしまうが、地図がなければ自分が中心になるのでひじょうに自由で開放的な気持ちになれる。テヘランがすぐそこなのか、何日もかかる遠いところなのか知らないが、とにかくこの道を行けば運がよければそのうち到着するだろう。あたりはゴツゴツした岩山ばかりで、そのあいだを縫うように、舗装された一本道が曲がりくねって、行く手の雲の中に消えている。この日の午前中はヒッチは快調で、4台くらいの車を乗り継いで、いくつかの村を通過した。そのあと捕まえたのはオンボロの鉱石輸送トラックだった。ひどいトラックで、スピードは出ないし、真っ黒な排煙をもうもうと出しながら、ガタガタと坂道を上ってゆく。他の車に何台も追い越される。だんだん標高が高くなり、ある峠道にさしかかったとき急にガスが出てきて視界がほぼゼロになった。通る車も少なくて心細くなってきたのに、運転手が「この車は採掘場に行くからここで降りてくれ」という。降りるとそこはガスって何も見えない上、強風が吹いて、寒いなの。ひどいところで降ろされたものだ。トラックは細い横道に入って、どこかへ行ってしまった。

しばらく歩くと、今度は雪が降ってきた。朝から何も食べていないので腹が減って、歩く気もしないし、リュックがやけに重く感じる。この上り坂の向こうには地獄が待ってるんじゃないかなと思うくらいつらい。ゆうべの雨騒ぎで寝不足だし、この寒さと空腹。着ているものはといえばTシャツの上にセーター1枚とヤッケだけ。風が身体の中を通り抜けてゆくようだ。後ろを何度も振り返っては車が来ないかを見るのだが、ガスっていてよく見えないし、風以外何の物音もしない。しばらくして一台の乗り合いタクシーが来たが、すし詰めの客たちが哀れみの視線を投げかけただけで、そのまま行ってしまった。連れが「もう休もう」と言うのだが、こんな時に休んだら寒さが増すだけで、吹雪の中で凍死してしまう。歩けるだけ歩かなければ僕らはその場であの世行きだ。吹雪は歩くにつれて激しくなり、車のエンジン音ももうあのタクシー以来聞いてない。指の感覚もなくなってきた。やはり無茶だったのかなあ。こんな高冷地を真冬に軽装で突っ切ろうというのは。もう何十時間も食い物らしい食べ物にはありついてないし、手持ちの食料もない。連れとの会話も少なくなり、とうとうお互いに黙ってしまった。両手をだらりと垂らして、足だけ動かしていた。頭の中には何もなかったような気がする。もうどのくらい歩いたのか、時間もわからなかった。止まったらおしまいだ、眠ったらおしまいだ。ふと行く手に山の中腹から温泉かなにかが吹き

上げているらしく、湯気が立っているのがかすかに見えた。風呂入りてえなあ。車よ来いという一念だけで歩き続けた。死にたくないという執念だけが足を動かしていた。すると朦朧とした頭の中にいろんな人の姿が浮かんで消えた。歩きながら半分眠っていたのかもしれない。リュックの重みも寒さも、もうあまり気にならなくなっていたのだから。吹雪の音を気持ちよく聞きながらある人の顔が浮かんだ瞬間、ハッとクラクションの響きに気がついた。小さなマイクロバスが停まっている。こっちへ来いと手を振っている。テヘラン、テヘランとつぶやきながら近づいて、乗客たちの手を借りて車の中に倒れ込むや、眠りに落ちてしまった。(注：このマイクロバスの終点の町ケルマンシャーに着いたあとで聞いたところ、あの峠はザグロス山脈を越える最大の難所で、歩いて越えようとはとんでもないとのことだった。)

-----

蛇足になりますが、当時はまったく気づかなかったし、気にもしなかったのですが、たったこれだけの記録の中にも、あとから考えれば不思議なことがいくつもあります。たとえば、イラク側でボーダーまで乗せてくれたハイクラスだと思われる将校ふうの軍人さんが、なんであんなところに一人でやってきたのだろう。また、なんでイラク側のオフィスに敵であるイラン軍のジープが停まっていたのだろう。いろいろ推測はできるのですが、よくわかりません。あるいは建築工事中の家で、あのおじいさんは何をしていたのだろう。あの人は何者だったんだろう。こうしたことは後タシナイ半島やモロッコで遭遇した出来事とリンクされてきますので、忘れなければそのときに。要は、この旅はこの旅で若かりし昔のこととして完結しているのではなくて、折に触れてあとからあれこれの部分が呼び起こされ、新たな理解というか知識の材料になります。そんなふうにして理解というのは時間と空間を超えてさまざまなことが結びついたり組み替えられたりしつつ、更新され続けてゆくのでしょうね。

\*\*\*\*\*

## 第2部

続いて<第2の旅>です。これは最初の旅の翌年の秋から、次回に詳しくお話する地図作りの仕事で約8ヶ月間をサウジアラビアの砂漠で過ごしたあと、1974年の夏から75年の春まで、アフリカとヨーロッパ、そして再びアフリカを旅したときの話です。

このときはサウジアラビアでの仕事で得たカネを持って、まずはまだ見たことのないイエメンを見てみたいと、サウジアラビアのジェッダ港から北イエメンのホデイダ港へ向かうメッカ巡礼の帰り船に乗ったのが始まりでした。そして次から次へと隣の国へ移ってゆき、気がついてみると仏領アフール・イッサ(現ジブチ)、エチオピア、ケニヤ、ウガンダ、タンザニア、再びケニヤと、東アフリカをひと巡りしていました。最初の旅と同じよう

な地べたを這いつくばるような貧乏旅行を続け、スーダンを通過してカイロまで行きまして、そこから帰国するつもりでしたが、まだヨーロッパを見たことがなかったので、帰りのおまけといった程度の軽い気持ちでギリシアからヨーロッパに入りました。ユーゴスラビア、ハンガリー、オーストリアと見て回り、確かにどこもきれいで快適なのですが、アジアやアフリカのようなエネルギーを感じられず、そろそろ帰国どきかなと思いながら西ドイツのミュンヘンに至りました。

今日の〈第2の旅〉の話にテーマがあるとすればこのあとです。ミュンヘンで、たまたまユース・ホステルのサロンで顔を合わせた日本人の貧乏旅行者3人と一緒に近くのインドネシア料理屋へ夕食に出かけました。私がアフリカの話をしたことがきっかけで、ビールの勢いもあって「ヨーロッパはもう飽きたからアフリカへ行こうか」という話になったのです。もちろんお互いに初めて会ったわけで、氏素性も知りません。しかもいわば酒の席の話ですので、その晩はそのまま別れました。翌朝、当然みんなもうアフリカのことなど忘れているだろうと思っていたら、一番小柄でエネルギッシュなサンタさん（本名は齋藤さん）がリュックを一杯にして、すぐにでも出発できる出で立ちで現れ、それを見た長身痩せ型のケンさん（本名は菊岡さん）が「おいおい、本気かよ」「じゃあ、行こうか」となり、私も彼らとその気なら、言い出しっぺということもあるし、サハラは一度は見ておきたかったので、「よし、行こう」となったのです。一番慎重派で理性派のクマさん（本名は清田さん）は逡巡していましたが（当然です）、いろいろあった末、結局参加することになりました。とりあえずの目的地は私の提案でケニアのナイロビ、しかもそこにある日本料理屋「赤坂」で日本酒で乾杯ということにしたのです。それから数日のうちに中古車を共同で買って「赤坂小町」と命名し、さまざまな書類手続きや備品の調達も済ませ、最初に出会った日から2週間後にはミュンヘンを出発したのです。なお後日談ですが、サンタさんがリュックを一杯にして現れたのは、別のところに彼は泊まっていて、汚れた下着類をユースで洗濯するために来たのだったそうです（笑）。

とにかくこうして1974年9月末からナイロビに到達した1975年1月末までの約4ヶ月間、私たち4人の若者は狭い「赤坂小町」の車内でずっと寝食を共にし、サハラ砂漠とサバンナとコンゴのジャングルを走り抜けました。とはいえ、もともとそれまではみんな一匹狼で旅をしていた個性派ですから、仲良しの修学旅行のようなわけにはゆきません。それぞれの流儀もあります。思惑の違いや意見の対立はしょっちゅうでした。しかしナイロビの赤坂という共通目標と、モロッコの木工所で切り出してもらった手作りの麻雀パイが4人を結びつけたような気がします。

私たちが走った経路をざっと言うと、ミュンヘンを出たあとフランス、スペインを通過してジブラルタル海峡をフェリーで渡りモロッコへ。さらにアルジェリアから南下してサハラ砂漠を縦断。ニジェール、ナイジェリア、カメルーン、そして中央アフリカ共和国の首都バンギで正月を迎え、さらにザイル（現コンゴ）の密林からルワンダへ上り、ウガンダを通過して目的地のケニアに到着。ちなみに、現在は政治上、治安上の理由でこのルートをたどる

ことはもうできないようです。



サハラの砂に埋まった「赤坂小町号」(1974年)

ともあれこの4ヶ月間、道中は当然さまざまな出来事の連続でしたし、じつにさまざまな人々に出会いました。話し始めればきりがありません。でもおそらくそうしたことは経験した自分たちだけに意味があることで、聞くほうは退屈になってくることでしょう。そこが今日この授業でお伝えしたいことのひとつなのです。具体的な村や町、こまごまとした出来事、出会った人物、そうしたことは他人が聞いてくれる「報告」には向かないのです。聞いてくれるとすれば、それはかなりの忍耐力を持った人でしょうね。そもそも経験というのは他でもなく、こまごました具体的な事柄そのものです。しかも具体的な事柄には起承転結がありません。明確な輪郭や形也没有。つまりとりとめがない。そのときの状況を再現する以外に他人に伝えるすべはないのだけれど、状況再現なんていうのは不可能です。だから筋や主張を伴った物語あるいは報告には馴染まないのです。高田純次が「年寄りな昔話はするな」というのはそういうことなんじゃないかな。話している本人は状況を知っているから面白いだろうけど、聞く方は退屈。

とはいえじつは私が本当に面白いと思っているのは、たとえ他人の話であっても、そうしたとりとめのないものの方なんです。年寄りの昔話やゴミ箱行きの報告がつまらないというとき、それは経験や現実が大事だというフリをしながら、往々にして文字通り下手な脚色をしてしまうからじゃないかなあ。その点上手い脚色は話が別で、圓生の噺や寅さんの口上なんていうのは技芸の域ですから、経験とか現実なんてそもそも必要としない。そんなものが入ってきたら台無し。とはいえ、それははじめから経験や現実なんてクソ食らえというフリをしているからこそ、じつは逆に別のところで現実感や共感をもたらされるのかもしれないね。バカバカしいものほど面白い。

さてもう一つこの旅についてですが、ナイロビに無事到着して、4人はバラバラに別れま

した。まず私が飛行機でエジプトのカイロへ飛び、ケンさんは一人で船でインドへ、サンタさんはやはり一人でスーダンからチャドへ、クマさんは別のメンバーを集めて赤坂小町を引き継ぎ、インドへ渡ったあとパキスタン、アフガニスタン、イラン、トルコを走り、再びミュンヘンへ帰還しました。その後もそれぞれ別々の人生を歩み、サンタさんは残念ながら数年前に亡くなりましたが、残る3人は45年を経た現在も健在で、連絡を取り合っています。この仲間たちと会うたびにお互いに言うのですが、「あの4ヶ月はただの4ヶ月じゃないなあ」。皆もう70年くらい生きてきて、それぞれたくさんの人世模様があったわけですが、たったの4ヶ月が4年にも、あるいはそれ以上にも感じられるのです。よく凝縮した時間などといわれますが、たしかに時間には濃淡がある。しかも時間は均一には流れず、折に触れて旅の記憶が鮮明によみがえり、その時々現在の現在と結びついて、通常の時間の流れは自在に入れ替わります。そうした状態を表す悪い意味では「トラウマ」という言葉がありますが、それとは逆の良い意味でのトラウマといってもよいのかもしれませんが、ケンさんは「原体験」とよく言っています。そこが単なるノスタルジーとは一線を画すところなのでしょうね。この旅が我々にとって原体験ないし良いトラウマだったとすれば、おそらく世の中のほとんどの人たちにも、良い意味か悪い意味かは人によって違っても、やはりトラウマ的なことが幾つかあると考えるのが自然だと思います。とすれば、人の生をあたかも履歴書のようにのっぺらぼうに捉えるのは大きな間違いだということになります。それとともに、空間ものっぺらぼうではないということも付け加えておきます。

次にこの旅に関して考えておきたいのが、これは「一つの」事実だったのかということです。4人が4ヶ月間ほぼ毎日朝から晩まで一緒にいたのだから、同じ経験を共有した、とはたして言えるのかということです。若い皆さんはご存じないかもしれませんが、昔黒澤明監督の『羅生門』という映画がありました。芥川龍之介の『藪の中』という作品が原作だそうです。機会があれば是非ご覧になったらよいと思いますが、そこでは3人の男女が絡むある事件が起こりました。ところがその事件の内容が三者三様、それぞれ言い分が異なり、どれが本当のことか、つまりどれが事実なのか分からないのです。結局事実は複数あるのではないかと考えさせるような映画です。

私たちの「赤坂小町の旅」もそれと似たようなものだったのではないかと思います。時間と場所を共有した出来事であっても、「事実」の内容は各人によって違っていた。一例を挙げるとすれば、ミュンヘンでのサンタさんの出現の仕方です。「もうすぐにでもアフリカへ出発できる姿で」というようなこと申し上げましたが、それはケンさんと私にとっての「事実」であって、サンタさんは「パンツ洗おう」というのが「事実」だったわけです。でもそれはそのときにはわかりませんでした。後日サンタさんからそうだったということを知り、初めて「な〜んだ」ということになったわけですが、そうすると最初の時点で、つまり当初のリアルタイムでは「事実」は二つあったわけです。まさに「藪の中」状態です。そしてその状態がそのまま次の「赤坂小町の旅」を生み出していったのですから、事実というものがいかに頼りないかがわかります。これを誤解といってしまうかもしれませんが、しか

し誤解もまた立派な事実なんですね。あるいは世の中はたくさんの誤解が寄り集まってきていると言えるかもしれません。事実の一つだと信じている人にとっては「誤解」なのかもしれませんが、どの誤解もみんな「正解」だというのが妥当なのではないでしょうか。そしていくつもの正解からなる「藪に中」が次の状態を生み出し、それがまた次の「藪の中」を生み出す。そうやって次から次へと「藪の中」が展開し続けてゆく。面白いじゃないですか！

ここでもう一つ罣があります。「ケンさんと堀内はサンタさんがすぐにでもアフリカに出発する気だと思ったけれど、それは誤解で、じつはサンタさんはパンツを洗いに来ていた」と、これが唯一の事実だ、チャンチャン。はたしてそう言えるでしょうか。サンタさんの後日の告白がなければ事実の一つだったけれど、サンタさんの告白によって事実は修正された、と「事実の一つ」論者はいうことでしょうか。それではさらに別の情報がこれに加わったらどうなるでしょうか。また事実は修正されてゆきますよね。そうすると事実っていったい何なんだということになりませんか？どこまで行っても事実は止まってくれません。

リアルタイムの危なっかしさということについては、皆さんも今実感していると思います。新型コロナ・ウイルスの感染者が現在リアルタイムでどのくらいいるのだろう。わかりませんよね。今日発表される数字は現在の感染状態ではなくて 2 週間前の状態だという。しかも発表されるのは検査を受けて判明した人の数字だということから、検査を受けていない感染者がその数十倍はいるだろうということと言う人もいます。だからたとえ 2 週間後になっても今日の感染者数の「事実」はわからない。つまりいつまでたってもいろんな数字が乱立する「藪の中」で、しかも新たな情報が付加されるたびに事実はどんどん変わってゆく。同じようなことを 9 年前の福島第一原発でも経験しましたよね。リアルタイムでは原子炉の中がどうなっているかは皆目わからなかった。いろいろな情報が付加されて 9 年たった今でも原子炉の中のことはわからない。「IT が発達して世界中のことがリアルタイムでわかるようになった」というキャンペーンはどこまで信じてよいのか。百年以上前にフランスのポワソネットという数学者が「今はまだ技術が不十分だから偶然を解き明かすことはできないけれど、十分な技術を獲得すれば偶然は無くなる。何でも予測できるようになる」というようなことを書いていましたが、その種の信念というか、むしろ信仰を前提にしなければ唯一の事実なるものは獲得できないのかもしれない。

大分脱線しました。何はともあれ、赤坂小町の旅は「それはそれでいいじゃん」ということでまだ続いています。ではまた来週。